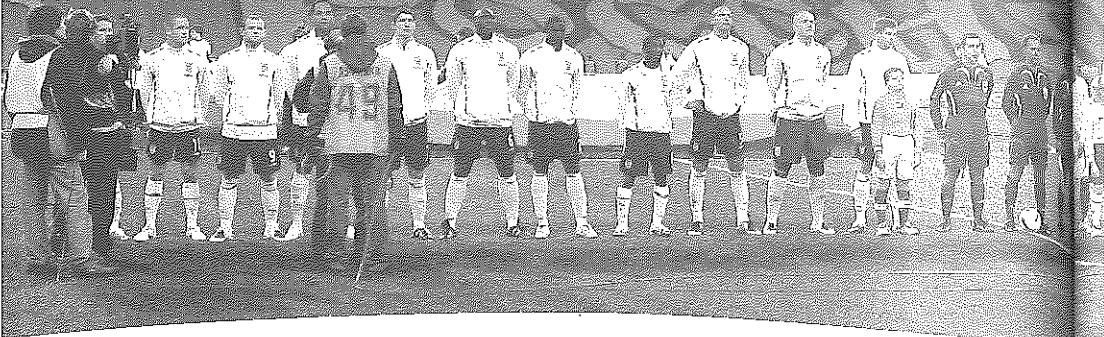


よみかえ

連れ、ロシア・サッカー！



10.17 ルジニキ決戦

昨年の10月17日、サッカー・ヨーロッパ選手権（ユーロ2008）の予選、ロシア対イングランドの一戦をテレビで観戦する機会があった。ここ数年、ロシア代表が国際舞台で活躍することは少なかったので、個人的にロシアの試合を観るのは5年振りのことだ。最後に観たのは、そう、2002年6月9日、日韓共催FIFAワールドカップ（W杯）における日本VSロシア戦である。

5年半の間に、ロシア代表はまったく別のチームになっていた。イングランド戦で出場した選手のうち、2002年の日本戦にも出ていた選手は、MFイーゴリ・セムショフただ一人だ（MF戸田和幸が無謀にもペナルティーエリア内で引きずり倒した相手である）。

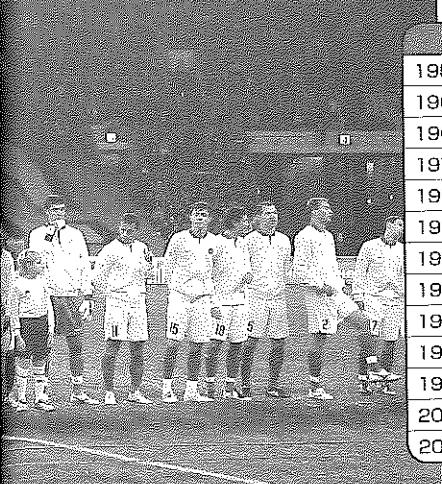
そして、現在ロシア代表を指揮するのが、オランダ人のフース・ヒディング監督。2002年W杯では韓国をベスト4に導き、2006年W杯ではオーストラリアを率いて日本代表を奈落の底に突き落とした、あの名将である。ロシアは、2004年のユーロで惨敗し、2006年W杯の出場も逃した反省から、初めて外国人監督を招聘し、代表チームの再生を委ねたのである。

さて、10月17日の一戦は、イングランドが勝てば2008年の本大会出場が決まり、逆にロシアはその可能性を失うという大一番だった。試合は、イン



運命のイングランド戦

ソ連／ロシア代表チームの二大会における成績



ワールドカップ（W杯）

1958	ベスト8
1962	ベスト8
1966	ベスト4
1970	ベスト8
1974	×
1978	×
1982	二次リーグ敗退（ベスト12）
1986	ベスト16
1990	グループリーグ敗退
1994	グループリーグ敗退
1998	×
2002	グループリーグ敗退
2006	×

ヨーロッパ選手権（ユーロ）

1960	優勝
1964	準優勝
1968	ベスト4
1972	準優勝
1976	ベスト8
1980	グループリーグ敗退
1984	×
1988	準優勝
1992	グループリーグ敗退
1996	グループリーグ敗退
2000	×
2004	グループリーグ敗退
2008	本大会出場決定

(注) 1990年まではソ連としての、1992年はCIS（旧ソ連）合団チームとしての、1994年以降はロシアとしての成績。「×」は予選で敗退し本大会に出場していないことを意味する。

写真提供／AFLO

グラントが前半にFW ウェイン・ルーニーの驚弾ボレーで先制するも、後半投入されたFW ロマン・パヴリュチエンコの2得点で、ロシアが逆転勝利を収めた。ヒディングお得意の攻撃的な選手交代と、モスクワ・ルジニキスタジアムに詰め掛けた7万8千観衆の後押しで、もぎとった勝利であった。

結局、この負けが尾を引いて、イングランドは続くホームでのクロアチア戦も落としてしまい、ユーロ2008出場を逃すことになる。代わってグループ2位に滑り込んだロシアが、本大会への切符を手にしたのであった。

黄金時代は遠い昔

さて、時代を少しさかのぼって、より長期的な視点で、ロシア（およびその前身国家であるソ連）サッカー代表チームの軌跡を跡付けてみよう。彼らにとって重要な二大会はW杯とユーロなので、両大会におけるソ連／ロシアの全成績を、上の表にまとめてみた。なお、W杯は1930年から開催されているが、ソ連が参加するようになったのは1958年からである。また、ユーロは1960年が第1回であり、ソ連は最初から参加している。

表を見れば一目瞭然のように、往時のソ連代表は世界でも一目置かれる強豪で、とくに1950年代から1970年代初頭が黄金時代だった。W杯こそベスト4が最高だが、ユーロでは優勝1回（初代チャンピオン！）、準優勝3回



を誇る。ちなみに、ソ連はオリンピックの男子サッカーでも、金メダルに2度(1956年と1988年)、銅メダルに3度輝いている。

ところが、1970年代の半ばから、ソ連のサッカーは振るわなくなった。1988年のユーロ準優勝とオリンピック優勝はあったにせよ、W杯やユーロの本大会出場を逃したり、出てもグループリーグであっさり負けたりすることが多くなった。そして、ソ連が崩壊し、新生ロシアの時代になってからは、W杯およびユーロの決勝トーナメントに一度も進出できていない。

ただ、次の点を考慮すべきだ。ソ連邦を構成していた15の共和国のうち、ロシアが突出した存在であったことは事実である。しかし、当然ロシアがソ連のすべてではなく、サッカーにおいても、あの時代になればなるほど、ロシア以外の共和国の比重が増していた。1986年W杯のソ連代表チームに至っては、ロシアの選手よりもウクライナの選手のほうが多いかった。ソ連が解体し、ロシア単独のチームになれば、戦力ダウンするのも当然である。

ソ連崩壊後、ロシアのサッカーが全般的に下降線を辿ってきた最大の原因は、やはり国の混乱・困窮にあったと言えよう。ただ、個人的には、サッカーのスタイルが時代遅れなことも一因ではないかと考えている。ロシアは、国的一般的なイメージに反し、とても品の良いサッカーをする。パスを丁寧につないで相手ゴールに迫るので、得点が決まった時にはすこぶる美しい。だが、手数をかける分、パスをカットされて失点したりするリスクも高く、勝負弱い面がある。現代フットボールは、守備は組織的に固めるにしても、ゴールを奪うというタスクに関しては、個の力に頼る部分が大きい。ロシアのスタイルでは、傑出したゲームメーカーやストライカーが育ちにくく、それが近年の低迷を招いているのではないかと思うのだ。

2000年代に入ると、ブーチン政権の下でロシア経済が上向き、サッカーにも復興の兆しが出てきた。国内のトップリーグは、2002年に「ロシア・プレミアリーグ」として再出発している。しかし、そんな矢先に、嘆かわしい出来事が起こる。2003年にロシアの石油王ロマン・アブラモヴィチ氏が巨費を投じて、イングランド・プレミアリーグの「チェルシー」を買収してしまったのだ。国民の共有財産であるはずの石油資源の富を、自国のサッカーチームならともかく、外国のブルジョア・クラブに惜しげもなくつぎ込むという暴挙であった。

罪滅ぼしと思ったかどうかは知らないが、ア布拉モヴィチは2004年に、



国内のクラブチーム「ЦСКА (CSKA) モスクワ」の実質的なスポンサー役を買って出た。テコ入れはすぐに効果を發揮し、同クラブは2004/2005年シーズンのUEFAカップで見事優勝を飾っている。代表・クラブを問わず、近年のロシア・サッカーで栄光と呼びうるのは、これが唯一であろう。

「大いなる退却」の果てに

ところで、ロシアのテレビ局のサッカー中継を観ていて、個人的に面白いなど感じことがある。たとえば、試合の残り時間が10分で、自国のチームが2点差で負けているとしよう。日本のアナウンサーならば、試合が終わる瞬間まで、「絶対に負けられない戦い！」「奇跡を起こせ」、「せめて一矢報いよ」と叫び続けるだろう。それに対し、私の印象では、ロシアの実況はとてもあきらめが良い。「この試合にはもう望みはありません。ほら、我が軍はシュートすら打てないじゃないですか。こんな試合のことはさっさとあきらめて、次のゲームのことを考えましょう」というようなことを、平気で言うのだ。

日本人は、絶望的な状況でも最後まで全力を出し切り、潔く散ることをよしとする国民である。玉碎の美学だ。それに対しロシアは、戦況が不利を見るや、無駄な抵抗はやめ、大胆に退却して次の戦いに備えようとする。ユーラシアの広大な大地に生れ落ちた民族ならではの戦略であろうか。現に彼らはそうしたやり方で、ナポレオン軍も、そしてナチス・ドイツすらも、撃退してきたのだ。

ソ連崩壊後のロシア・サッカーの低迷も、こうした「大いなる退却」の一局面だったという捉え方もできるかもしれない。仮にそうであれば、退却のあとに来るのが輝かしい勝利であっても、何ら不思議はない。さしあたり、2008年6月、スイス・オーストリアの地で開かれる EUROで、ヒディング率いるロシア代表がどんな戦いを見てくれるのか、注目だ。果たして20年振りの決勝トーナメント進出はなるか？



ロシア NIS 貿易会とは？ ロシア NIS 貿易会は、日本とロシア・NIS諸国との経済関係を促進するために活動している団体です（NISとは、旧ソ連から独立したウクライナ、中央アジアなどの新興独立国を指します）。このコーナーでは、ロシア地域のスペシャリストである同会のスタッフが持ち回りで、バラエティ豊かなエッセイをお届けいたします（同会につき詳しくは、<http://www.rotobo.or.jp>）。